54　忘れじの　行く末までは　難ければ　今日を限りの　命ともがな

儀同三司母



砂浜のハート

〈声に出してよんでみよう〉

ワスレジノ　ユクスエマデワ　カタケレバ

キョーオカギリノ　イノチトモガナ

＊ワ行エ段の「ゑ／エ」、ワ行オ段の「を／ヲ」はそれぞれ、「エ」・「オ」と読みます。古代にはそれぞれ [we]・[wo] と発音されていたらしいのですが、11 世紀頃、ア行エ段の [e] とヤ行エ段の [je] がともに [je] となり、ア行オ段がワ行オ段と同じ [wo] となり、やがて 17～18 世紀頃、それぞれ [e]・[o] に変化したと言われています。

＊語頭以外のハ行の文字、つまり、語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、ワ行音「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[1] 助詞の「は」も、現代語と同様、「ワ」とよみます。これを、「ハ行転呼音」と言います。

＊「エ段の音＋う／ふ」は、「ヨー」（前に子音がある場合には「ョー」）とよみます。したがって、「けふ」は「キョー（今日）」、「てふてふ」は「チョーチョー（蝶々）」とよむことになります。[2]

〈どんな意味だろう〉

決して忘れはしない、というあなたの言葉が、

この先もずっと変わらないことは難しいだろうから、

いっそ、今日を限りの命であったらいいのに。

（そうすれば、この先あなたに忘れられるという目に遭わずにすむのに。）

＊「じ」は、打消意志の助動詞です。「行く末」は、将来。「もがな」は、願望を表す終助詞です。

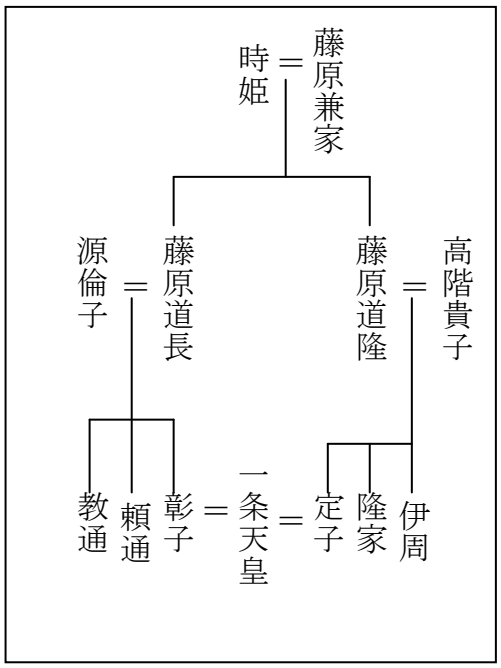
〈解説〉

平安時代の結婚は、男性が女性の家に夜通って来るという「**婿通い婚**」の形態をとっていました。一人の男性が複数の妻を持つことも、普通に行なわれていました。夫の足が遠のけば、自然に離婚は成立します。夫の訪れを待つことしかできない不安定な立場の女性の嘆きは、この時代、いくつもの歌に詠われています。

しかし、恋の成就の瞬間さえ、やがて訪れる別れをおそれ、いっそ、今の幸福な状態のまま命を終えてしまいたい、とは、これは、何と激しく、何と切ない歌なのでしょうか。幸福の絶頂にあっても、決してそれに溺れてしまわず、自らの運命を冷徹に見据えるしたたかな目が、作者には備わっていたということでしょうか。聡明であったという作者の評判は、この歌によっても、裏付けられているようです。

〈作者と出典〉

儀同三司とは、**藤原伊周**（974－1010）のこと。その母とは、**藤原道隆**（953－995）の妻の、**高階貴子**（？－996）という女房名で出仕したこともありました。中流貴族の出身ですが、漢詩文の教養にすぐれ、利発で機知に富む性格を愛され、当時政権を握っていたトップ・エリートの家系の道隆の妻となり、伊周・隆家・**定子**らの子女を生みました。定子は、一条天皇の后となります。この定子に仕えた女房が、**『枕草子』**の作者である**清少納言**（→「62 夜をこめて」）です。**随筆**文学の嚆矢である『枕草子』には、笑いに満ちた知的で和やかな定子周辺の雰囲気が生き生きと描かれていますが、これは、貴子の才智を受け継いだことによるのでしょう。



儀同三司母人物関係図（＝は婚姻関係）

しかし、道隆の　然の　　とともに、一家の　　も終わりを　えます。　　みであったことから来る、　　であろうと　　されています。伊周・隆家　　は政　から　　して　から　　の身となり、政権は道隆の　の道長（みちなが）の　に　ります。貴子は、　嘆のうちに世を　りました。一条天皇のもとには、道長の　の彰子（しょうし）が、　しい后としてやって来ることになります。この彰子に仕えた女房が、『源　物語』の作者として名高い　　（→「57 めぐり　ひて」）です。

貴子は、夫の道隆とは　い　げることができました。しかし、一家の　　という　運を目（ま）の当たりにしなければなりませんでした。やはり、そうなる前に、幸福の絶頂のただ中で、命を終えていた　がよかったと　っていたのでしょうか・・・。貴子に　えたら、一　、　てみたい気がしませんか？

なお、この「忘れじの」の歌の出典は、　　目の勅撰（ちょくせん）和歌　（天皇の命（てんのうのめいれい）で編集（へんしゅう）された和歌集（わかしゅう））である『　古今和歌集（しんこきんわかしゅう）』（13 世紀　め頃成立）です。

---

1 ハ行（ぎょう）の子音（しいん）は、　世紀頃（せいきごろ）に [p] から [Φ]（現代語（げんだいご）の「　」の子音（しいん））に変化（へんか）し、やがて 11世紀頃（せいきごろ）、前　（んご）を母音（ぼいん）にはさまれた語中（ごちゅう）・語尾（ごび）の [Φ] が [w] と発音（はつおん）されるようになりました。なお、[Φ] が [h]（現代語（げんだいご）の「ハ・　・　」の子音（しいん））に変化（へんか）したのは、17世紀（せいきごろ）頃と　定（すいてい）されています。

2 　　母音（にじゅうぼいん）は発音（はつおん）しにくいためです。この変化（へんか）も 11世紀頃（せいきごろ）のことと　えられています。